

## 教育的公共圏 — さくぶん.org の設営と運営 —

### Sakubun.org : an educational public sphere in practice

得丸 智子<sup>1)</sup> 武田 知子<sup>2)</sup> 本林 響子<sup>3)</sup>

*Satoko TOKUMARU, Tomoko TAKEDA and Kyoko MOTOBAYASHI*

#### Abstract

This research propounds a possibility of a public sphere for an educational purpose, based on a practice at the university level courses. We set up an electronic bulletin board called 'sakubun.org' which has '3 steps and 5 rules', as a public sphere for an educational purpose. The analysis of the written communication on this electronic bulletin board revealed that 1) the participants communicate using their own experiences as resources, 2) the discussion can develop from personal experiences into further discussions, and 3) a fellow feeling for other members emerges by exchanging opinions. We propose that it is important for the university classes to construct a public sphere for an educational purpose by collaboration among practitioners.

*keywords : an educational public sphere, sakubun.org, electronic bulletin board*

#### I. 本研究の背景と目的

インターネットによる通信環境の発達には、世界的な規模で、公開的な言説空間の創出を可能にした。今や、インターネットに接続されたパソコンさえあれば、誰でも簡単に、学校や自宅等の日常的な空間から公開的な言説空間にアクセスできる。インターネットの発達は、公的空間に、個人が自らの言説を携えて現れ出ることを容易にした。インターネット空間のこのような特性は、時として、表現の自由の名を借りた誹謗中傷の横行という否定的事態を引き起こす。2004年の長崎県の小学生児童殺人事件では、インターネット空間での言説が原因の1つとなったと報道された。しかし、インターネット空間は、健全な市民活動の舞台ともなる。干川(2003)<sup>1)</sup>は、阪神大震災等災害時のボランティア活動を検証し、インターネット空間が、市民運動およびボランティア活動において重要な働きを果たすことを論じている。インターネットの自由な言説空間は、いわば諸刃の刃であるといえる。

インターネットの発達は、大学教育の領域でもさまざまな新しい取り組みを産み出した。国境を越えた協

同学習環境で異文化理解が深まること(才田1997)<sup>3)</sup>や、インターネット上の学びの実践共同体で、専門家から非専門家へと文化的知識の伝達が行われること(中原他2000)<sup>2)</sup>等が報告されている。これらの取り組みは、特定授業の教育目標を、より効果的に達成するためにインターネット空間を活用するものである。

しかし、インターネット利用の教育には、もう一つ重要な側面があると考えられる。公開された自由な言説空間に自主的に参画し、健全な議論を展開できる個人を育成することである。これは単なるインターネットマナーの教育ではない。学生に「自らの言説を携えて公的空間に現れ出ること」や「健全な議論が思考の深まりにつながること」の体験学習を促すのである。そのためには、学生が安全に参加できる教育的な配慮に基づく実体空間が必要である。

本研究では、教育的配慮に基づく、公開された自由な言説空間を教育的公共圏と呼ぶこととし、インターネットを利用した教育的公共圏「さくぶん.org」を設営する。そこで交わされた言説を質的に分析する方法で、教育的公共圏での体験学習の様相を探索的に把握し、教育的公共圏のあり方を考察する。これを通じて、大学教育における教育的公共圏設営の必要性を提起する。

1) 日本女子体育大学(助教授)

2) 恵泉女子学園大学(講師)

3) トロント大学オンタリオ教育研究所(大学院生)

## II. 教育的公共圏の設営

教育的公共圏とは、教育的配慮に基づく、公開された自由な言説空間である。このような空間を作るために、筆者らは、日本国内外の複数の大学の授業を結んで電子掲示板を設営した。教育的配慮を施す方法として、得丸(2000ab, 2001)<sup>4)5)6)</sup>で行われている「3ステップ5ルール」の文章交換活動」を採用した。

「3ステップ」とは、作文執筆による「自己表現ステップ」→感想文執筆による「相互交流ステップ」→感想文に対するコメント（筆者コメントと呼ぶ）の執筆による「振り返りステップ」の活動形式を指す。この形式は書くことを通じて言説空間に現れ出で、他の参加者から反応をもらい、それを取り込んで自らの言説を発展させるというサイクルを体験することを可能にする。また、感想文のみの参加も可能であり、参加クラスの状態や参加者のニーズに柔軟に対応できる。

「5ルール」とは、①教師は文章の内容や表現上の巧拙を直接的に成績評価の対象としない、②現在の自分の考えや感情の率直な表現を歓迎する、③他の人の文章を読む時には、文章筆者の表現したいことに耳を傾ける姿勢で読むよう心がける、④作文、感想文の交換は匿名で行う。⑤自分の作文、感想文を他の人に読まれたくない場合は教師に申し出る。その場合、教師に提出するのみとし、他の参加者には見せない（電子掲示板に掲示しない）である。クラス担当教師は、「5つのルール」を参加者に告知し、ルールが守られるよう活動の雰囲気作りにつとめ、感想文が付かない作文がないよう協力を呼びかけたり、他の参加者を傷つけるような文章（個人を誹謗中傷するような発言等）が投稿された場合は別置して対応したりするなどの配慮を行う。これらのルールにより、学生が自主的に言説空間に現れ出ることを奨励し、かつ、参加したくない学生に不参加の自由を保障することができる。また、成績評価に捕われることなく、自らの責任による自由で率直な言説を携えて公開的空間に現れ出ることを奨励でき、不適切な発言には、背後から教師が対応することが可能となる。教師の監督下で匿名性を徹底することにより、インターネット空間以外の日常的な大学生活場面と一線を画すことができる。

また、「3ステップ5ルール」の文章交換活動」は、紙媒体利用も含めて大学教育で豊富な実績があり、外国人留学生を含む参加者に「率直な自己表現の体験」「相互に受容し理解し合う体験」「親密感の体験」が進行す

ることが報告されている（得丸2000ab, 2001）<sup>4)5)6)</sup>。この方法は、学生が安全かつ自由に自らの言説を展開できる1つの有力な方法であるといえる。「3ステップ5ルール」の文章交換活動」を電子掲示板に移植して設置し、アドレス <http://www.sakubun.org> にちなんで「さくぶん.org」と呼称することにした。

「さくぶん.org」を用いて、2002年8月から11月にかけて、日本の2大学とオーストラリアの1大学の教育現場を結んで、「2002年ワールドカップサッカーが残したもの」のテーマのもとに電子掲示板を運営した。参加者は、日本とオーストラリアの大学生約170名である。参加者の内訳は、日本人大学生99名、日本の大学で学ぶ留学生57名（中国38名、台湾9名、韓国5名、フランス1名、インドネシア1名、ベトナム1名、マレーシア1名、ミャンマー1名）、オーストラリアの大学の日本語学習者10名（オーストラリア4名、台湾4名、韓国1名、香港1名）であった（括弧内は自己申告による出身地）。尚、匿名性への配慮から参加者番号で個人を特定したため、参加者番号の記入ミスから、厳密な参加人数の把握が難しい場合があった。全参加者の出身地と人数を図1にまとめた。

自己表現ステップ（8月1日～9月14日）の作文は80編、相互交流ステップ（9月22日～10月21日）の感想文は279編、振り返りステップ（10月22日～11月5日）の筆者コメントは84編で、計443編が投稿された。尚、今回の運営した活動では、電子掲示板への不参加を希望した学生はいなかった。また、教師が削除したり、個別に対応したりする必要がある文章は投稿されなかった。

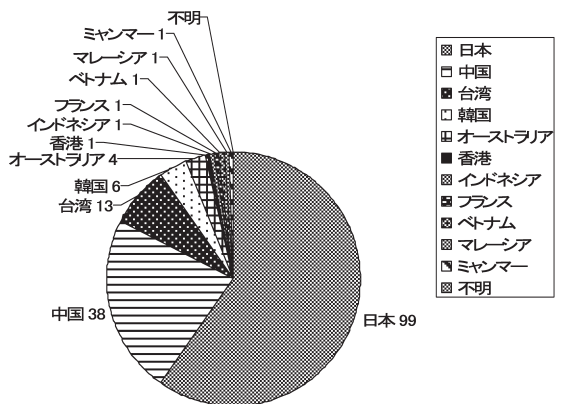


図1 参加者の出身地別内訳

### III. 分析方法

#### 1. 分析手順の概略

教育的公共圏における体験学習の様相を分析的に把握するためには、実際に電子掲示板上で交わされた言説に密着して質的に分析する必要がある。本研究では、3人の分析者が、資料となる文章を繰り返し熟読して看破される特徴を抽象化し、それを個々の文章に戻して確認する方法をとることとした。確認にあたっては、3人の分析者が別々に作業し、結果を照合した。一致しない場合は、一致するまで協議した。

まず、言説のやりとりの起点となる作文に表れた話題を分析した。その後、頻出上位3話題に分析対象を絞り、感想文、筆者コメントの話題を分析した(話題分析)。次に、話題分析で同一話題であるとコーディングされた部分に着目し、スレッド内の作文と感想文、感想文と筆者コメントのつながりを対象に、話題内容がどのように展開されているかを分析した(展開分析)。さらに、展開の具体例を分析的に記述した。

#### 2. 話題分析の手順

①分析者1名が、全作文を対象に、作文に書かれている話題を短い言葉で表し、話題コード表を作成した。②上記1名を含む3名の分析者が、話題コード表に基づいて、5編の作文の話題をコーディングし、3人で照合、協議した。協議の結果、コード表とコード方針の一部を修正した。③修正した話題コードとコーディング方針に基づき、3名の分析者が全作文をコーディングし、照合、協議した。

話題コーディング表は、結果の項に掲載する。修正したコーディング方針は次の通りである。①話題のコーディングは、なるべく大括りにする。具体的には、②段落単位でコーディングし、段落の内部では、なるべく異話題をコーディングしない。③やむをえず異話題をコーディングする場合には「段落途中」と注記する。④隣接する段落が同話題としてコーディング可能な場合は、なるべく同話題とコーディングする。⑤同話題とするのが不自然な場合に、異話題をコーディングする。

全作文を通じて出現回数が最も多い3つの話題に着目し、3つの話題のいずれかを含む作文で始まるスレッド(作文-感想文-筆者コメントのひとまとまり)を抽出した。その結果34スレッドが抽出された。抽出された34スレッドを対象に、感想文と筆者コメントの

話題をコーディングした。使用した話題コード表、コーディング方針は、作文をコーディングした際と同様とした。3名の分析者が、別々にコーディングし、照合、協議した。作文、感想文、筆者コメントを通じて上記3つの話題が引き続き表れているスレッドを抽出した。抽出されたスレッド数は31であった。

#### 3. 展開分析の手順

展開分析のコーディングは次の手順で行った。①分析者1名が、上記手順で抽出された31スレッドの、作文と感想文の関係、感想文と筆者コメントの関係を対象に、話題内容の展開の様相を短い言葉で表し展開コード表を作成した。②上記1名を含む3名の分析者が、展開コード表(表2)に基づいてコーディングし、照合、協議した。③コーディングを通じて、先行する文章(感想文の場合は作文、筆者コメントの場合は感想文)で述べられていることに同意する「同調」が広く見られたため、まず、すべての分析対象に対して「同調」の有無を判定することとした。その後、展開の様相を詳細にコーディングすることにし、コード表に修正を加えた。その上で、「同調」の有無の判定と修正コードに基づく再コーディングを行った。3名の分析者が判定とコーディングを行い、照合、協議した。分析的記述の具体例は、代表例を分析者1名が選出し、2名が確認した。

### IV. 分析結果

#### 1. 話題分析の結果

話題分析は文章中の話題を分析したものである。全作文を対象にした分析と、頻出上位3話題の感想文、筆者コメントを対象とした分析の2つからなる。

コーディングに使用した話題コードを、コーディング結果とともに表1に掲載する。

この結果に基づき、頻出上位3話題、「日韓共同開催」「日本人/韓国人の一体感」(以下、「一体感」と略記する)「サッカー人気」を特定した。

この3話題のいずれかを含む作文34編を起点とする34スレッドを対象に、さらに、感想文、筆者コメントの話題をコーディングした。

その結果、作文34編中、1話題を展開するものは4編と少なく、2話題が10編、3つ以上の話題が20編で約59%と過半数を占めた。感想文99編では1話題を展開するものが50篇で全体の半分を占め、2話題が27編、

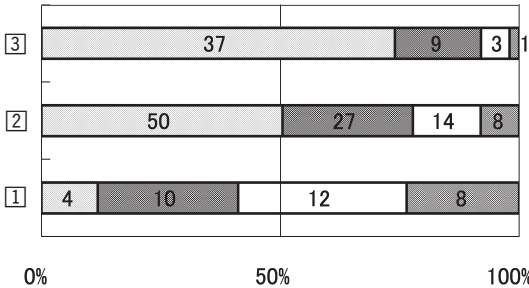
表1 話題コードと作文のコーディング結果

コード内容	数	コード内容	数
日韓共同開催	26	サッカー・今後	4
日本人/韓国人の一体感	17	Jリーグ	2
日本人/韓国人の国民性	11	サッカー・その他	5
日本/韓国を世界に知らせた	6	個人に焦点(例:ベッカム)	10
国際交流(異文化交流)	5	誤審	8
国を越えた一体感	5	経済効果	5
各国のナショナリズム	5	スタジアム問題	6
サッカー・人気	18	マスコミ報道の偏り	5
サッカー・競技力	8	チケット問題	5
サッカー・試合結果	7	その他(列挙・羅列)	4
サッカー・自分との関わり	11	導入部分	29
サッカー・歴史	2	まとめ部分	11

注記：数は、全作文を通じた出現回数

表2 展開コード

コード名	コードの内容
同調終始	同調に終始し、結論が展開されていない。
発展	結論と同方向の「その先」を発展させている。
詳細化	結論に変更はない。結論に至る過程、理由等を、詳細に説明している。
補強(体験)	結論に変更はない。結論を直接体験を綴ることによって補強している。
補強(情報)	結論に変更はない。結論をマスコミ等から得た情報によって補強している。
差異化	結論の大筋を共有してはいるが細部に違う点があり、差異が強調されている。
反論	結論が相違している。
新視点	本筋とは異なる新たな視点が持ち出されている。
包摂	感想文で付加された内容を自分の言葉として語り直している(筆者コメントのみ)。



注記：①は作文，②は感想文，③は筆者コメント

図2 1編の文章の中に含まれる話題数

3話題以上が22編であった。筆者コメントは50編あり、1話題を展開するものは37編で全体の74%となった、2話題が9編、3話題以上が4編であった。

この結果から、作文では1編中に多くの話題が展開されるが、感想を受けた後、1つに絞られていく傾向がわかる。作文、感想文、筆者コメントに含まれる話題数(%)を図2に示す。

## 2. 展開分析の結果

展開分析は、個々のスレッド内の作文と感想文、感想文と筆者コメントのつながりを対象に、話題分析で同一コードであると判定された部分に着目して、話題内容がどのように展開されているかを分析したものである。「同調」の有無を判定した分析と、展開コードによる分析の2つからなる。

最初に感想文、筆者コメント112編について「同調」の有無を判定した。その結果、感想文73編のうち約90%

にあたる66編、筆者コメント39編のうち約76%の30編が「同調」を含んでいた。

次に、話題内容の展開の様相をコーディングした。表2の展開コードに基づきコーディングした結果を、表3に掲載する。話題から次第に逸れていくものは「逸脱」とした。

感想文では、「発展」(約20%)、「同調終始」,「補強(体験)」(約19%)が全体の約60%を占めていた。話題の特徴として、「日韓共同開催」には「発展」(約20%)、「同調終始」(約16%)、「補強(体験)」 「差異化」 「反論」(約13%)、「詳細化」 「補強(情報)」(約10%)が表れており、感想筆者は賛成、反対意見を活発に述べていることが指摘できる。「一体感」には「同調終始」 「補強(体験)」(約29%)、「発展」(約23%)が多く「差異化」 「反論」は少ない。「サッカー人気」にも「発展」 「補強(体験)」(約19%)、「同調終始」(約15%)が多かった。

筆者コメントでは、「包摂」(約31%)が多かった。話題別では「日韓共同開催」は「包摂」(約27%)について「詳細化」 「反論」 「新視点」(約16%)、「一体感」では「包摂」 「同調終始」(約25%)、「サッカー人気」では「包摂」(約41%)、「発展」 「補強(情報)」(約16%)であった。いずれも、感想の内容に沿い意見を述べる傾向が見られた。

表3 展開コード集計結果

	コード名	日韓共催	一体感	サッカー 人気	合計
感想文	同調終始	5 (16)	5 (29)	4 (15)	14(19)
	発展	6 (20)	4 (23)	5 (19)	15(20)
	詳細化	3 (10)	0	3 (11)	6 (8)
	補強(体験)	4 (13)	5 (29)	5 (19)	14(19)
	補強(情報)	3 (10)	0	2 (7)	5 (6)
	差異化	4 (13)	1 (5)	2 (7)	7 (9)
	反論	4 (13)	1 (5)	1 (3)	6 (8)
	新視点	1 (3)	0	2 (7)	3 (4)
	逸脱	0	1 (5)	2 (7)	3 (4)
	計	30	17	26	73
	コード名	日韓共催	一体感	サッカー 人気	合計
筆者コメント	同調終始	2 (11)	2 (25)	1 (8)	5 (13)
	発展	0	1 (12)	2 (16)	3 (7)
	詳細化	3 (16)	0	1 (8)	4 (10)
	補強(体験)	0	1 (12)	1 (8)	2 (5)
	補強(情報)	1 (5)	0	2 (16)	3 (7)
	差異化	1 (5)	1 (12)	0	2 (5)
	反論	3 (16)	0	0	3 (7)
	新視点	3 (16)	1 (12)	0	4 (10)
	包摂	5 (27)	2 (25)	5 (41)	12(31)
	計	18	8	12	38

( ) 内は%, 小数点以下は切り捨て

### 3. 具体例の分析的記述

この項では、具体例に即して話題内容の展開の様相を分析的に記述する。( )内に自己申告による筆者情報を、居住地、出身地、性別の順に記す。【 】に展開コードを記す。

#### 1) 体験の語り合いから論が生まれる

自らの体験を語り合う中で、論が生まれたり、深まったりする様子が見られた。具体例1では、作文でワールドカップ観戦の感情体験が語られ、感想文でも同じく観戦体験が語られている。2人の筆者が異なる文化的文脈にあるため、体験の内容に異なりが生まれている。そのやりとりを通じて、作文筆者は「一体感」に対する複眼的な視点を獲得している。

**具体例1 作文：**だれが集まろうだとか、一緒に

応援しようといったわけではないのに、ひとつの目標（日本の勝利）に向かい…進んでいった。こんなに日本中が一体化したことがあるだろうか？私は記憶がない。（日本在住，日本，男性）

**感想文：**オーストラリアは多民族国家なので、世界のいろいろな国から人々が集まっている。…サッカーは一体感ももたらしたけれども、また、いさかきも起こした。…シドニーでもイタリアのチームの試合の後、勝ったのに、イタリア人が暴動を起こした。一体感の裏には人間の醜さがある。（オーストラリア在住，オーストラリア，男性）【発展】

**筆者コメント：**一体感というものが時として、良くないほうに進んでいってしまうものですね。まさにあなたのいうとおりだと思います。【同調終始】

#### 2) 「発展」「包摂」により論が深まる

感想文が作文の論を「発展」し、筆者コメントが感想文の意見を「包摂」する形が広く見られた。具体例2は、作文の「愛国心」を感じたという体験が、2つの感想文で肯定的に受け止められている。そのうちの1つの感想文では「それぞれの国を精一杯応援することが大切」と論が「発展」させられた。これらのやりとりを経て、筆者コメントでは、作文筆者自らの中から、「同一意識をもって協力すること」と「ナショナリズム」の違いという視点が立ち上がっている。

**具体例2 作文：**勝ち負けがすべてではないが、やはり負けるより勝つ方がうれしい。この感じはナショナリズムといえ少しおおげさかもしれない。しかし、自分が日本国民であるという意識を改めて感じさせられた。（日本在住，日本，男性）  
**感想文：**私も、勝ち進む日本というものに強く惹かれていた一人です。…ゲームということをしちんと念頭において、それぞれの国を精一杯応援することが大切ではないかと思います。（日本在住，日本，女性）【発展】

**感想文：**予想外に勝ち進み、頑張っている日本代表を見て、熱くなり、夢中になって応援している自分に気付いた。その時に、これはもしかしたら愛国心と呼べるものが自分の中にもあるのではないだろうかと思ったのである。（日本在住，日本，男性）【同調終始】

**筆者コメント：**これからも日本国民が同一意識を

もって協力することはすごく良いことだと思います。ただ、このこととナショナリズムとはついつい混同してしまいそうになります。…現在の変わりつつある世界情勢の中、また国内政治についても、平和な生活をするためにはこの区別をする必要があります。…少なくとも一人一人がなにか変だな、とひっかかることができるようにすべきではないでしょうか。【発展】

次に挙げる具体例3のような「包摂」の形も、数は多くないが散見された。作文で響き渡る君が代と翻る日の丸に触れた瞬間の「実感」が語られたのに対し、「くさいっすね〜！」ではじまり「くさくさになってしまった」で結ぶ感想文には、文中にもあるとおり感想文筆者なりの「本音」が感じられる。筆者コメントは、感想文の「過去のことは過去のこと」を「そうですね」と「包摂」して展開しているが、ここでの「包摂」は、異質のものがかろうじてつながりを保持している姿といえる。タイプの異なる日本人大学生が、それぞれのスタイルで「現れ出ていること」に注意しておきたい。

**具体例3 作文：**私達は実感したはずだ。あのグラウンドで響き渡った「君が代」。大きく翻った「日の丸」。日本国民がひとつになった瞬間。忘れるなかれ。これこそが、この世紀の祭典ワールドカップで垣間見得た日本の自虐的な態度を蹴散らせるものだとすることを。(日本在住、日本、男性)  
**感想文：**くさいっすね〜！ていうか熱いというべきか。…過去のことは過去のことじゃん、日本も韓国も。お互いそういうくだらないがみ合いはやめて、本音でいきましょうって言いたいね！ちょっとくさくさになってしまった。(日本在住、日本、男性)【逸脱】  
**筆者コメント：**過去のことは過去のこと。そのとおりですね。「今」「未来」を見つめて、両国とも、高めあっていけたらいいですね。…まず、日本国民である誇りを持って、どの国とでも対等に関わりあっていけるようにしていけたらいいですね。【包摂】

### 3) 「差異化」「反論」により論が深まる

「差異化」や「反論」を経て論が深まる様子が観察された。筆者コメントでも「反論」し、意見が一致しない場合も多い。次に挙げる具体例4は、「憤り」という

率直な感情表明から出発し、筆者コメントが「反論」で結ばれている。しかし、「スポーツにおける競争」と「国同士の過去の呪縛」を分けて考えるべきであるという視点が立ち上がっている。

**具体例4 作文：**今大会で、私は韓国に何回も憤りを感じた。私はこういう韓国を見て日本と韓国とはこれからずっと真の友好関係を築くのは不可能ではないかと思う次第です。(日本在住、日本、男性)

**感想文：**スポーツは本当にリラックスのためにあり、4年に一度のワールドカップサッカーは、サッカー選手とサッカーが熱愛する人々は世界中から同時に開催国に行く。サッカー試合は、国と国の戦争じゃなくて、違うチームサッカー技術を比べることだ。…戦争とスポーツ競争を識別することは必要だ。(オーストラリア在住、香港、女性)【反論】  
**感想文：**恐らく多くの韓国のサポーターは今回のワールドカップを、スポーツを通して国際関係をよりよく友好的なものにし、お互いに一体感を得る機会であるとは微塵も考えていなかったのだろう。(日本在住、日本、男性)【詳細化】

**感想文：**ワールドカップ後に実施された両国でのアンケートでは…日本人の多くは、共催によるワールドカップは、成功だった、との意見が多く見られたが、韓国では、自国による単独開催の方がすばらしいものにできた、との意見が半分に近かったらしい。…友好関係の一步を築くなら、そのような考えはしてほしくないし、ほとんど無駄だったのかと思ってしまう。(日本在住、日本、男性)【補強(情報)】

**筆者コメント：**確かに僕はスポーツと国同士の過去の呪縛とをリンクさせすぎていたかもしれせん。あなたが言うようにスポーツとは純粹のリラックスの方法の1つでありストレス発散の1つであるかもしれないですね。…本来オリンピックとは古代ギリシアでのポリス同士の抗争を抑えるためにできたものであり…現代ではどうでしょう？【反論】

### 4) 言説を交わすことで仲間意識が生まれる

「さくぶん.org」で言説を交わすことによって仲間意識が生まれていくことを語っている例が見られた。具体例5では、言説をやりとりする体験が「人と人の

関係がよくなった」と捉えられている。これらの「新視点」が参加者の言説の中で自然に立ち上がっている。

**具体例5 作文：**私の理解では、日本人と韓国人の関係は少し悪く仲がよくないと思います。しかし、日本と韓国は、地理的にとても近く、生活や文化や食べ物などは大抵同じだと思います。…日韓の侵略戦争について新聞やテレビの番組などで知ったので、日韓の歴史は少し知っています。日本と韓国が共同で行うワールドカップによって、日韓関係を改善することができたら、両国の経済や貿易や政治にとってもそのほうがいいでしょう。(オーストラリア在住、台湾、女性)

**感想文：**日韓関係について無知な人は大勢いることだと思います。なぜ知らないのかといえば、知らないのではなく知ろうとしないのだと思います。(日本在住、日本、女性)【差異化】

**感想文：**中国人の私としては、あまり関係ないと言えるけど、世界平和を求めるために、同じアジア人としてなんとかいいことをして、人民のために、いい方法を探して、うまく解決していいじゃないの？(日本在住、中国、女性)【発展】

**感想文：**色々難しいことは抜きにして、素直に考えて、両国の関係が前進してきたのではないかと思った。この台湾出身の筆者の感想(作文)を読んだことである。(日本在住、日本、男性)【同調終始】

**感想文：**この意見には私は深く同感です。第3者の国の人で韓国と日本の関係についてよく理解して書いていて感銘を受けました。そうです。…韓国と日本のことをいちばん近い国で一番遠い隣の国だといわれていますが、今度のことをきっかけに韓日は一番近い国、一番近い隣の国になるために新しい方法を模索しているようです。(オーストラリア在住、韓国、女性)【同調終始】

**筆者コメント：**皆の色々な感想を読んで交流したら、他の人々の思うことが多分分かったと思った。そして、人と人の関係がよくなったと思った。これは日韓共同開催というワールドカップで行われたことと同じだ。【新視点】

ある参加者は筆者コメントで「今回はたくさんの人の文を参考にさせてもらい、みんなの色々な捉え方が分かりました。また、それぞれ違った観点から見てい

るのだなと驚きました。このワールドカップサッカーは広い意味で私たちにたくさんのものを残していったと思います。」(日本在住、日本、男性)と表現していた。「たくさんの人」→「みんな」→「私たち」と仲間意識が形成されていく様子を見いだすことができる。

## V. 考察と今後の課題

今回設営した教育的公共圏「さくぶん.org」では、参加者は全員、文章を投稿し、掲示板への不参加を希望する学生はいなかった。また、教師が、削除したり、個別に対応したりしなければならぬような個人を誹謗中傷する発言等はなかった。今回の実施から、一定のルールを設ければ、投稿した文章を成績評価の対象とする等の条件をつけず、自由な発言を奨励しても、健全な議論が進展することが確かめられた。

作文、感想文、筆者コメントの「3ステップ」からなるスレッドの話題を分析したところ、作文では、1編の文章に複数の話題が盛り込まれることが多いことがわかった。これは「話題を1つに絞って書く」という一般的な文章表現教育の目標とは相容れない現象である。「5ルール」の第2で「自分の考えを率直に表現する」とあるのみで特に文章表現上の指導を行わないため、思いつくことを思いつくまま書く傾向が生じたためであろう。教師が背後から見守る環境であっても、学生は、かなり自由に自らの言説を繰り広げていたとみてよいであろう。また、感想文、筆者コメントと進むにしたがって、1編の文章に含まれる話題数が少なくなる傾向が見られた。自然な言説のやりとりの中で、次第に論点が絞り込まれていったことが窺える。

先行する文章との関係を分析した展開分析では、「同調」を基調とする全体的傾向が見られた。感想文では、自らの体験を語って作文の内容を補強するものが多かった。また、感想文で、作文の結論の先を「発展」させたり、筆者コメントで、感想文の論を自分の論に「包摂」したりする傾向がみられた。これらから、「同調」して関係をとり結び、相手の意見を取り入れながら自らの思考を深めようとする様子が窺えた。

また、自らの「体験」や「感情体験」の率直な表明が発起点となり、やりとりの中で、1つのことに複数の見方が立ち上がったり、1つのことを2つに分節して捉え直そうとしたりする傾向が生じていた。「発展」「包摂」だけでなく、「反論」や「差異」の強調で結ばれるスレッドにおいても、この傾向は同様であった。

これらから、私的な体験から出発し、言説のやりとりの中で、多様な見方が開かれたことが読み取れる。

さらに、「さくぶん.org」に集って言説を交わし合うことが、人と人が親密になる体験であると感じられており、「皆」「私たち」と表現される仲間意識が自然的に醸成される様子が観察された。

以上の検討を通じて、教育的公共圏「さくぶん.org」では①参加者は自らの体験を資源として言説を交わし合う、②私的な体験を出発点として議論が深まる、③言説を交わし合うことで仲間意識が生まれる、の知見を得ることができた。適切な教育的配慮に基づいて教育的公共圏を設営すれば、学生に「自らの言説を携えて公的空間に現れ出ること」「健全な議論が思考の深まりにつながること」を、体験的に学ぶ機会を提供することができる。

今回は「3ステップ5ルール」の文章交換活動を電子掲示板に移植する方法で教育的公共圏を設営し、一定の成果を得られたが、方法は今後も工夫する必要があるであろう。学生が自らの責任において自由に発言することを奨励し、かつ、教師が背後から適切な方法で見守る環境を実現することがポイントになるであろう。方法は1つである必要はない。様々な方法で、複数の大学教育の現場が連携して、教育的公共圏を設営することが望まれる。

最後に、今後の教育的公共圏の設営に資するために、問題点を整理して結びとしたい。今回の実施で最も困難だったのは、複数の教育現場の協同であった。開講時期、シラバス、コンピューター使用の問題から、授業時間内に活動したクラスと、自宅学習中心のクラスが混在することとなった。授業時間使用クラスでは、授業時間以外に「さくぶん.org」にアクセスする学生は少なかった。一方、自宅学習中心のクラスでは、文章を書く習慣ができたという学生もいたが、負担を感

じた学生もいた。評価方法も、活動参加の積極性を評価の一部に組み入れたクラスと、全く評価対象としなかったクラスが混在した。文章指導の面でも、教育的公共圏への参加という目的に合致した指導方法を、日本人母語話者、外国人日本語学習者それぞれのレベルやニーズに合わせて開発する必要があるだろう。

#### 参考文献

- 1) 千川剛史(2003)公共圏とデジタル・ネットワーキング, 法律文化社, 東京.
- 2) 中原 淳, 西森年寿, 杉本圭優, 他(2000)議論を通じた協同的な問題解決を支援するCSCL環境の開発, 日本教育工学会誌 24 (Suppl.): 97-102.
- 3) 才田いずみ(1997)コンピューター通信によるコミュニケーション型日本語学習支援システムの研究, 平成7-8年度文部科学省科学研究費補助金国際学術研究報告書.
- 4) 得丸智子(2000a)大学生を対象とした作文交換活動における個人過程の分析, 人間性心理学研究 18-1: 46-57.
- 5) 得丸智子(2000b)留学生と日本人学生の作文交換活動における個人心理過程, 日本語教育 106: 47-55.
- 6) 得丸智子(2001)作文交換活動のインターネット利用の試み, 言語文化と日本語教育 22: 64-76.

付記 参加者のみなさんと、ニューサウスウェールズ大学(オーストラリア)のトムソン木下千尋先生に感謝致します。この研究は、平成14年度二階堂学園奨励研究「インターネットを利用した作文交換システムの開発」の補助金を受けました。

(平成17年9月21日受付)  
(平成17年11月24日受理)